

— 報 文 —

小学校における俳句教材の在り方について

— 平成十七年度使用予定の教科書を中心に —

入 江 昌 明

要 旨

小学校では平成十七年度から新しい教科書が使用されることになっていく。その新しい国語の教科書に収載されている俳句作品の検討を通して、小学校における俳句教材の在り方について考察した。これまで俳句指導は小学校から高校まで名句を理解・鑑賞させる方法で行われてきたが、小学校でそうした指導方法を採用する場合、よほど慎重に俳句作品を選定しなければ、それが仇となり俳句嫌いの児童を作り出してしまふ恐れがある。

キーワード：俳句 haiku、小学校 elementary school、
教材 teaching material、教科書 textbook、
指導 guidance

一 はじめに

俳句が教材として国語の教科書に取り上げられるのは、小学校高学年になってからである。そこで児童は初めて俳句と正面から向き合うわけだが、その時、いかなる作品を教材として与えればよいのであろうか。この問題は、俳句を指導する上で看過し得ぬ極めて重要な問題の一つと言ってよい。なぜなら、俳句のような短詩型文学においては、最初に出会った作品に対する印象がそのままジャンル全体の印象となってしまう

ケースが珍しくないからである。児童が初めて俳句と出会った時、俳句をユニークで面白い文芸と受け止めるか、それとも難解で詰まらぬ文芸と受け止めるかでは、その後の指導は全く違ったものになってしまう。俳句を指導する者は、そのことを常に肝に銘じておかなければならない。

さて、小学校では、平成十七年度から一部改訂された新しい教科書が使用されることになっている。現在、小学校で使用されている国語教科書は、東京書籍、光村図書、教育出版、学校図書、大阪書籍、日本書籍の六社の教科書である。このうち、日本書籍は平成十六年に教科書検定の申請を行っていないので、平成十七年度からは残る五社の国語教科書が使用されることになる。新しい教科書にはどのような作品が教材として取り上げられているのであろうか。本稿では新教科書に収載された俳句教材の検討を通して、小学校における俳句教材の在り方について私見を述べてみたい。

二 俳句の指導時期と収載句数

現行の教科書においても取り扱う俳句教材に違いが見られるように、

新教科書においても俳句教材は各教科書会社によって違いがある。歳時記に言及しているものもあれば、児童の作品を例示し創作を勧めているものもある。また、児童に覚えてほしい俳句を資料編にまとめて列挙しているものもある。そうした教科書会社による俳句教材の取り扱ひ方の違いについては後で触れることとし、まず各教科書会社が俳句の指導をどの時期に設定し、どの程度の俳句作品を収載しているのか、その二点を明らかにしておきたい。

	平成8年 ～ 平成11年	平成12年 ～ 平成13年	平成14年 ～ 平成16年	平成17年 ～
東京書籍	6年下巻 8句	5年上巻 6句	5年下巻 6句	5年下巻 6句
光村図書	6年上巻 6句	6年上巻 6句	6年上巻 4句	6年上巻 6句
教育出版	6年上巻 6句	6年下巻 8句	6年上巻 9句	6年上巻 9句
学校図書	6年上巻 3句	6年上巻 3句	6年上巻 3句	6年上巻 3句
日本書籍	6年上巻 7句	6年上巻 7句	6年下巻 7句	6年下巻 7句
大阪書籍	6年下巻 6句	6年下巻 6句	6年上巻 7句	6年上巻 7句

右表は平成八年以降の小学校国語教科書における俳句の指導時期と収載句数を示したものである。この表は俳人協会が『¹学校教育と俳句』に平成八年～十一年度と平成十二・十三年度に使用された教科書の俳句の指導時期や作品数などを表にしたものを一部改変し、現行の教科書と新

教科書の俳句の指導時期と収載句数を補充したものであるが、この表を見る限り、俳句教材に関する扱ひは新教科書も現行の教科書と殆ど変わっていない。

まず指導時期について見ると、東京書籍だけが新教科書においても現行の教科書と同様「五年下巻」で俳句を取り上げ、その他の四社は現行の教科書と同じ「六年上巻」で俳句を取り上げている。俳句教材が五、六年生に配当されているのは、小学校学習指導要領（「国語」の「第5学年及び第6学年」の「言語事項」）に

エ 文語調の文章に関する事項

（ア）易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。とあり、「文語調の文章」の指導時期が高学年に指定されているからであらう。

収載句数については、光村図書が現行の教科書の四句をそれ以前の六句に戻した他は、全て現行の教科書と同じである。五社の新教科書に載る総句数は三十一句、その中から複数の教科書に重出する句を引いた実質句数は二十五句である。これをそれ以前の教科書と比較してみると次のようになる。なお、（ ）内の句数は日本書籍を除いた場合の合計数である。

平成十七年度使用予定教科書

総句数 ↓ (三十一句) 実質句数 ↓ (二十五句)

平成十四～十六年度使用教科書

総句数 ↓ 三十六句 (二十九句) 実質句数 ↓ 三十句 (二十六句)

平成十二・十三年度使用教科書

総句数↓三十六句（二十九句） 実質句数↓二十六句（二十四句）
平成八年〜十一年度使用教科書

総句数↓三十六句（二十九句） 実質句数↓二十六句（二十四句）
これを見ると、平成八年以降、収載句数は殆ど変わっていないことがよくわかる。

三 新教科書における俳句教材の収載状況

既に見たように、五社の新教科書が「短歌と俳句」の単元に収載する作品数は現行の教科書と殆ど同じである。しかし、それは現行の教科書の句がそのまま新教科書に再録されたことを意味するわけではない。では、両者の間にはどの程度の異同が認められるのであろうか。次にそうした点を中心に、各教科書会社の俳句教材に対する取り扱い方を見ていくことにする。現行の六社の各教科書に収載されている俳句については、既に俳人協会が『学校²における俳句指導』にまとめているので同書の要領に従い、まず新教科書が収載する句を各教科書毎に示し、次に関連資料があればそれも取り上げ、最後に現行の教科書との違いや特色などについて言及してみたい。

『東京書籍五下』（現行の教科書 六句） ↓ （新教科書 六句）

〈新教科書に収載された俳句教材〉

- 閑さや岩にしみいる蟬の声 松尾 芭蕉（解説付き）
- 雪とけて村一ぱいの子どもかな 小林 一茶
- 夏の蝶日かげ日なたと飛びにけり 高浜 虚子

○夏草に汽缶車の車輪来て止まる 山口 誓子

○とゞまればあたり²にふゆる蜻蛉かな 中村 汀女

○白葱のひかりの棒をいま刻む 黒田 杏子

注 ○印は現行の教科書にも収載されている句である（以下、他社の場合も同様）。なお、教科書に施されているルビは煩を避けて削除した（以下、他社の場合も同様）。

※他に、『六年下巻』の「感動をリズムにのせて——言葉のリズムを生かし、表現をくふうして俳句を作ろう。」に六年生が作った次の俳句七句と作句を勧める文章が収載され、その後に「俳句と歳時記」と題した短い解説文が付されている。

いねかって田んぼの道が遠く見え 坂本由香里

秋晴れの空の真ん中かららん車 脇谷 幸

自転車をきれいに洗う秋はじめ 渡辺奈津美

赤とんぼ遊びつかれてさあかえろ 富田 真吾

運動会笑顔はどっちも負けてない 葛本 雅樹

虫の声だれかがきつと指揮してる 小泉奈保子

すすきのほ一本ずつは悲しそう 市川三保子

〈考〉現行の教科書と全く同じ俳句六句が、新教科書の「五年下巻」に収載されている。現行の教科書にあった「ハイク」に関する短い解説文と『季節のことば』ブックを作ろう」が新教科書では削除され、新たに「六年下巻」の「感動をリズムにのせて——言葉のリズムを生かし、表現をくふうして俳句を作ろう。」に六年生の作った俳句七句と作句を勧める

文章が、またその後に「俳句と歳時記」と題した短い解説文が収載されている。俳句の創作を取り上げた点はそれなりに評価できるが、俳句教材全体としてはこれまでに比してやや軽い扱いとなっている。現行の教科書に載る『「季節のことは」ブックを作ろう』（全八頁）は、児童一人一人に季節を意識させ自分流の歳時記を作らせることによって俳句における季語の重要性を認識させようとするもので、扱い方によっては環境問題など多様な方向へ展開させていくことのできるすぐれた教材であっただけに、この度の削除は惜しまれる。「総合的な学習の時間」と組み合わせるなどして復活を期待したい。

また、世界のような国で子どもたちがハイク（外国語で作った俳句）を作っている現実を紹介した解説文「ハイク」も、日本の児童にとってハイパクトの強い内容なので、ぜひ再録してほしい教材である。

『光村図書六上』（現行の教科書 四句）↓（新教科書 六句）

〈新教科書に収載された俳句教材〉

五月雨を集めて早し最上川	松尾 芭蕉（通釈付き）
菜の花や月は東に日は西に	与謝 蕪村（通釈付き）
外にも出よ触るるばかりに春の月	中村 汀女
万緑の中や吾子の齒生えそむる	中村草田男
赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり	正岡 子規
流れ行く大根の葉の早さかな	高浜 虚子

〈考〉現行の教科書より二句増え、それ以前の教科書と同数の六句が収

載されている。○印がないことから明らかなように、現行の教科書の四句は全て差し替えられている。新たに収載された六句の中、「外にも出よ」と「流れ行く」の二句はいずれも有名な句であるが、平成八年以降の教科書には初めて登場する句である。残りの四句は既に他社の教科書に収載されたことのある言わば定番的な句である。新教科書に限らず、総じて光村図書の俳句教材に対する扱いは単調で、他社に比して有名な俳人のよく知られた作品をただ機械的に羅列しただけという印象が強い。児童に興味を抱かせるような仕掛けや工夫がもう少しあってもよいのではないだろうか。

『教育出版六上』（現行の教科書 九句）↓（新教科書 九句）

〈新教科書に収載された俳句教材〉

古池や蛙飛こむ水のおと	松尾 芭蕉（解説付き）
ひぎの児の頬べたなめる小てふ哉 <small>（ちやう）</small>	小林 一茶
万緑の中や吾子の齒生え初むる	中村草田男
○妹を泣かして上がる絵双六	黛 まどか
○卒業の兄と来てゐる堤かな <small>（い）</small>	芝 不器男
この道の富士になり行く芒かな	河東碧梧桐
菜の花や月は東に日は西に	与謝 蕪村
梅一輪一りんほどのあたたかさ	服部 嵐雪
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 <small>（え）</small>	正岡 子規

※「短歌と俳句」の単元の中に、次の古川柳四句と川柳についての解説文が収載されている。

芭蕉翁ぼちやんといふと立寄り

江戸古川柳

○はへば立て立てば歩めの親心

○まだももは流れてこぬに子はね入り

本降りに成て出て行雨やどり

その他、同じ「六年上巻」の「いろいろな文体で書く」の中に、「俳句ふう」として、

「木の下で せみににげられ ただ一人」の作品が載っている。

〈考〉収載句数は現行の教科書と同じ九句で、五社中最多である。九句の中、現行の教科書と同じ句は二句だけで、七句が新しい句に差し替えられている。その七句中、「古池や」・「ひぎの児の」・「この道の」・「梅一輪」（学校図書の巻末の資料編には既出）の四句は平成八年以降「短歌と俳句」の単元に初めて登場する句で、残る三句は既に他社の教科書に採られたことのある有名句である。新教科書においても「家族」とか「自然」などテーマ別に作品を提示したり、気鋭の若手女流俳人（黛まどか）の作品を取り上げたりして、児童が俳句の世界に入っていくやすいよう工夫が凝らされている。教育出版の俳句教材の中で特筆すべきは、「短歌と俳句」の単元中に川柳を取り上げている点であろう。短歌とセットのように扱われる俳句に対し、川柳はこれまで教材として殆ど取り上げられることはなかったが、俳句と全く同じ詩型である以上当然取り上げるべきで、またそうすることによって児童の俳句に対する理解もより確かなものとなるはずである。

『学校図書六上』（現行の教科書 三句）↓（新教科書 三句）

〈新教科書に収載された俳句教材〉

○万緑の中や吾子の歯生えそむる

○菜の花や月は東に日は西に

○赤い椿白い椿と落ちにけり

※『六年下巻』に『連詩』を発見する」と「連詩を作ろう」が、資料

編に「四季のうたに親しもう」のタイトルで次の俳句九句が収載されている。

梅一輪一輪ほどの暖かさ

服部 嵐雪

目には青葉山ほととぎす初がつを

山口 素堂

雪とけて村いづばいの子どもかな

小林 一茶

しづかさや岩にしみ入るせみの声

松尾 芭蕉

夏河をこすうれしさよ手にざうり

与謝 蕪村

朝顔につるべとられてもらひ水

加賀千代女

かき食へばかねが鳴るなり法隆寺

正岡 子規

名月をとつてくれるとなく子かな

小林 一茶

旅にやんで夢は枯れ野をかけぐる

松尾 芭蕉

なお、同じ「六年下巻」の資料編に、「季節の言葉集め」のタイトルで「新年」・「春」・「夏」・「秋」・「冬」の季語がそれぞれ十一語ずつ収録されている。

〈考〉平成八年以降、佐々木幸綱執筆の「短歌と俳句」が収載されており、それは新教科書においても同様である。取り上げられた句は三句と

少ないが、その分個々の作品に対する解説が他社よりも丁寧で詳しくなっている。また、作品も色彩感が豊かでイメージしやすい句ばかりを選んでいるので、児童が楽しく俳句を味わえるようになっていいる。例句の少なさを補うように、「六年下巻」の巻末の資料編「四季のうたに親しもう」に古典俳句を中心に九句が収載されている。これは現行の教科書の「六年下巻」巻末に「覚えておきたい俳句」として挙げられていた二十二句に相当するもので、句数が激減しているのはこれまでなかった短歌が七首新たに付加されたからである。

俳句教材とも一部関連するので付言しておく、現行の教科書に初めて収載された大岡信の「『連詩』を発見する」と「連詩を作ろう」が、新教科書においても引き続き収載されている。連詩は連歌や連句の手法を詩の世界に応用したもので、そうした全く新しいジャンルの教材を積極的に取り入れているのは、教材作成に対する学校図書柔軟な姿勢を窺知させるものとして注目される。

『大阪書籍六上』（現行の教科書 七句）↓（新教科書 七句）

〈新教科書に収載された俳句教材〉

- | | |
|-------------------|-------------|
| しづかさや岩にしみ入るせみの声 | 松尾 芭蕉（解説付き） |
| 菜の花や月は東に日は西に | 与謝 蕪村（解説付き） |
| しんしんと肺碧きまで海の旅 | 篠原 鳳作（解説付き） |
| ○梅雨晴れやとところどころに蟻の道 | 正岡 子規 |
| ○さじなめて童たのしも夏水 | 山口 誓子 |
| 月の夜や石に出て鳴くきりぎりす | 加賀 千代 |

○大根引大根で道を教へけり

小林 一茶

※同じ「六年上巻」の「みんなの詩」の中に、次に掲げる児童の俳句作品が各季節二句ずつ収載されている。

チュールリップさき観覧車回ってる

関 哲也

たんぼの綿毛は白いパラシュート

酒岡美有樹

クロールの上げるうでから見える空

小野寺健太郎

夕立が上がり街また動き出す

土屋 圭子

秋の風とべたとび箱ふり返る

田中由理子

わたり鳥真一文字に飛んでくる

福原 繁基

オリオンを母に教えた冬休み

宮尾 凉子

黒板の文字が光って外は雪

熊谷 雅弘

また、「五年下巻」の「昔の仮名づかいを調べよう」の中に、歴史的仮名遣いの一例として一茶の次の二句が挙げられている。

やせがへる負けるな一茶これにあり

うまさうな雪がふうわりふわりかな

〈考〉現行の教科書と同じ七句が収載されている。七句の中、現行の教科書と同じ句が四句、残る三句の中、一句は他社の教科書に既出する有

名句で、残る「しんしんと」と「月の夜や」の二句は平成八年以降教科書に初めて登場する句である。「しんしんと」の句の作者である篠原鳳作は早世したマイナーな俳人で、そうした作者の作品を初めて取り上げている点は高く評価してよい。また、新教科書の「六年上巻」には六年生の作った俳句八句が新たに取り上げられており、俳句教材は現行の教

率は約3・7となっている。

○ 芭蕉・一茶・子規の三人は各三句、碧梧桐・虚子・汀女・誓子の四人はそれぞれ二句ずつ取り上げられており、代表的な俳人の作品が複数句採られる傾向が認められる。

○ 複数の教科書に最も多く採られた句は蕪村の「菜の花や」の句で四社を数える。

○ 二十五句中、平成八年以降四回続けて教科書に採られている句が八句、三回採られている句が六句、二回採られている句が二句、今回新たに採られた句が八句あり、同じ句が連続して収載される傾向が認められる。

こうした指摘は他にもできようが、この表から言えることで最も重要なことは、総じて教科書には著名な俳人の有名作品を取り上げようとする傾向が著しいということであろう。しかし、それは新しい教科書に限ったことではなく、現行の教科書においても、またそれ以前の教科書においても等しく認められる傾向である。

振り返ってみると、これまでの俳句指導はいわゆる名句の理解・鑑賞に終始してきたと言っても過言ではない。そうした指導法は小学校から高校まで一貫して行われており、現行の教科書にも相変わらず有名な作者の代表的な作品が数多く収載されている。そして、それが新しい教科書にも踏襲されていることは既に見た通りである。

まだ俳句という文芸を知らない児童に俳句の本質を理解させ俳句のおもしろさを実感させるためには、まず児童を優れた作品と出会わせることが重要であるが、その際留意しなければならないのは、提示される作

品はただ単に文芸作品として優れているだけでなく、教えられる児童に相応しい俳句作品でなければならないということである。作品が児童に相応しいということは、児童の大多数が句の内容に興味や関心が持てたり、共感できたり、情景を具体的にイメージできたり、ユーモアが分かたり、五七五で表現することのおもしろさや表現の巧みさが実感できたりするということである。

概して、昔の子どもに比し今の子ども達は自然の中で自然を相手に遊ぶことが少なくなっている。また、身近な自然の変化を通して季節の移り変わりを感知取ることも減ってきている。そのように自然環境や生活環境が大きく違ってきている現代の子ども達に理解しやすいすぐれた俳句を用意するには、子どもの視点に立った作品検証が不可欠だが、その点、従来の教科書は取り上げた作品が名句であるということに甘え、入門期の教材としての検証がやや疎かになっていたように思われる。

いかに作者が高名で世評の高い名句であっても、児童がその句の内容をよく理解できなかつたり、その句の良さやおもしろさを実感として感じ取れなかつたりすれば、その句は教材としては不適當であると言わざるを得ない。そのような児童の目線に立って新教科書に収載された二十五句を改めて眺めてみると、入門期に相応しい作品として積極的に評価できるのは、次の十二句ぐらいではないかと考えられる。

- 4 「梅一輪」・5 「月の夜や」・6 「菜の花や」・7 「雪とけて」・8 「ひざの児の」・14 「しんしんと」・15 「赤い椿」・16 「この道の」・17 「夏の蝶」・19 「万緑の」・21 「外にも出よ」・24 「白葱の」

これらの句はいずれも印象が鮮明で、詠まれた場面や情景、その時の作

者の心情が児童にも分かりやすい句である。

残りの十三句の中には、教師の適切な助言があれば十分に理解・鑑賞できる作品もあるが、入門期の俳句作品としては疑問符の付くような作品もないわけではない。例えば、

- 1 「古池や」・3 「五月雨を」・10 「かき食へば」・11 「赤蜻蛉」・18 「流れ行く」

などである。1 「古池や」の句の場合は、句意を理解させ蛙が池に飛び込む光景を思い描かせることはできても、小学生に春日遅々とした味わいを実感させるのはそれほどたやすいこととも思われなし、10 「かき食へば」の句も、句意と柿にかぶりついた途端に鐘が鳴ったという淡いユーモアを理解させることはできるだろうが、この句の淡泊な味わいを今の子ども達に味あわせるとそれは至難のことのように思われる。

3 「五月雨を」と11 「赤蜻蛉」の句には、「最上川」と「筑波」という固有名詞がそれぞれ用いられている。3 「五月雨を」の句は「最上川」が日本三急流の一つであることを、11 「赤蜻蛉」は筑波山の山容をそれぞれ具体的に思い描くことができ初めて真の鑑賞ができるわけだが、果たしてどれだけの児童が生き生きと両句の情景を思い描けるのか疑問である。18 「流れ行く」は、評価をめぐって物議を醸した句である。一句の評価はさておき、この句の場合、畑で抜いた大根を川で洗っているような場面を全く想像できない者にとっては、「大根の葉」が流れて行く様はイメージできても、その背後にある世界はなかなかイメージしにくいのではないだろうか。

このように俳句にとって最も重要な一句の味わいとか情趣を実感しに

くいような作品が入門期の教材として取り上げられているのは、典型的な俳句を与えることこそが俳句指導の要諦と考えられているからであるが、いかにも俳句らしい名句を与えることによって俳句に魅力を感じない子どもが増えているとすれば、それは極めて皮肉な現象だと言わざるを得ない。最初に述べたように、小学校の教科書に収載された俳句は、その後の子ども達の俳句観を決定づけてしまうほど大きな影響力を持っている。そのことを各教科書会社は十分に認識し、児童にとって分かりやすく、しかも共感しやすい名句を教科書に収載すべきであろう。また、各教科書会社はそうした義務を有している筈である。

五 おわりに

以上、平成十七年度から小学校で使用されることになっている国語教科書の俳句作品を概観してきたが、入門期における俳句教材については、現代の児童の目線に立って再検討する必要があることを明らかにし得たのではないかと思う。

これまで授業の中で、多くの女子学生に「俳句は好きですか?」、「俳句を作るのが趣味の人?」などと尋ねてきた。しかし、「俳句が好きで、趣味で俳句を作っています」と答えた学生に残念ながらまだ出会ったことがない。俳句好きの学生がいない原因が全て「入門期における俳句指導」にあるとは思わないが、これまでの俳句教材を見る限り、全く無関係のようにも思われぬ。

世界で多くの子どもたちが「ハイク」を楽しんでいるという。だが、教師が同時に俳句作者でもあるような特別な場合を除き、本家である日

本の子どもが俳句を作って楽しんでいるという話は寡聞にして知らない。何とも淋しい話である。早く日本の子どもたちが心から俳句を楽しんでいる感じ、五七五の世界で自由に遊べるように、五社の教科書会社に俳句教材の見直しをお願いして本稿の結びとしたい。

注

(1) 俳人協会編『学校教育と俳句』 平成十三年 俳人協会

この表の収載句数は、俳句の理解と鑑賞を目的として設けられた単元(俳句が短歌とセットで取り上げられている単元)に収載された作品数で、創作の単元で取り上げられている児童の作品や巻末の資料編に収載された作品は含まれていない。

(2) 俳人協会編『学校における俳句指導』 平成十三年 俳人協会

参考文献

- 1 佐藤和夫著『海を越えた俳句』 一九九一年 丸善
- 2 日航財団編『世界「子供の俳句」コンテスト』 一九九二年 学生社
- 3 佐藤広也著『子どもたちはワハハの俳句探偵団』 一九九七年 労働旬報社
- 4 『月刊国語教育研究』 日本国語教育学会編 一九九八年一月号
- 5 藤井罔彦著『俳句の授業・作句の技法』 一九九八年 明治図書
- 6 俳人協会編『学校教育と俳句』 平成十三年 俳人協会
- 7 俳人協会編『学校における俳句指導』 平成十三年 俳人協会